

魚津の教育

魚津市教育センターだより178号
令和7年12月発行
魚津市教育センター
〒937-0053 魚津市村林町1-21
TEL (0765) 23-9161

「伝わる」会話を大切に

魚津市教育委員会 事務局長 田中 明子

伝言ゲーム、面白いですよね。

何人かで1つのチームを作り、耳打ちしながら次の人へ伝えていくというこのゲーム、誰もが一度は経験しているのではないでしょうか。不思議なことに、短い文章であっても最初の人から最後の人まで正しく伝わらないことがあり、誰が間違ったかをあとで見つけては笑いに包まれます。



伝言ゲームから見えてくるのは、「伝える」と「伝わる」の違いではないでしょうか。「伝える」は、発信者側の目線であり、相手に聞く態度がなくとも相手の耳に届けば伝えたことになります。一方「伝わる」は発信者の伝えたいことがきちんと相手に理解されているか確認しあう必要があります。伝言ゲームは、伝えることに主眼が置かれているため正しく伝わったかどうかを確認できません。なので時に間違いが発生し、ゲームが面白くなるのですが、普段の生活でょっちゅう伝言間違いが発生するようでは、笑いを通り越して疲れや怒りのタネになりかねないので注意が必要です。

ところで、日々の生活に会話は欠かせません。教育分野で代表的な会話の場といえば学校の授業ではないでしょうか。教職員の皆さんは児童生徒に「伝わる」授業づくりに知恵を絞り会話を実践しておられることだと思います。一般事務職の私は会話の相手がもっぱら大人なのですが、対面や電話での会話をはじめ目新しいところではコロナ禍で普及したオンライン会議など、会話で相手に「伝わる」コツと感じていることがいくつかあります。

①分かりやすい言葉をつかう

大人どうしの会話であっても、中学生が理解できる程度の言葉を使うのが理想。専門用語や横文字をむやみに使うのは要注意。相手の理解度を気にしていない印象を与えるかも。

②相手に寄り添う

話しかけられたときは相手の話をよく聞き、知りたいことは何なのかを想像しながら会話する。こちらから話すときはまず話の主題を伝えることで、相手は会話の準備ができる。

③話しそぎない

一方的に話すと情報量が多すぎて相手の集中力に影響し、伝わりにくくなる恐れあり。特に説得の会話ではお互いに話すと聞くのバランスに配慮するのが望ましい。

私がこれらに気づいたきっかけは、元NHKアナウンサーである岡部達昭氏の「伝わってこそ言葉」と題した寄稿文です。結びに、情報誌「テレコム・フォーラム」2022年8月号に掲載された岡部氏の寄稿文の一部を紹介します。

○子ども科学電話相談に学ぶ

「子ども科学電話相談」というラジオ番組があります。「恐竜をペットにするには?」「宇宙人は悪者なの?」など、全国の小中学生が電話で訊いてくる素朴な疑問に、ジャンル別に専門家の先生が答えるのです。これが実に良いのです。子どもは自分の疑問を懸命に言葉で伝えます。回答者の先生は、子どもがなぜそういう疑問を持ったのか、一番知りたいことは何なのかを熱心に探ります。そして子どもの理解を細やかに確認しながら説明します。そのやり取りの呼吸が見事に伝わってくるのです。子どもも先生も、まさに「伝わったかどうか」の世界で会話をしているのです。

第62回 魚津市小・中学校科学展覧会

魚津市小・中学校科学展覧会が、9月20日（土）・21日（日）の2日間、新川文化ホールで開催されました。

「くふう創作の部」、「研究調査の部」、「標本・模型の部」の3部門に、市内各小学校から選出された55作品の出品がありました。「魚津市教育委員会賞」に16作品が選ばれ、そのうち3作品が県科学展に出品されました。今年度は「研究調査の部」と「標本・模型の部」の作品数が昨年度よりも増加しました。子供たちの興味関心や疑問に思ったことからテーマを決めて、粘り強く調査を続けた作品が多かったです。

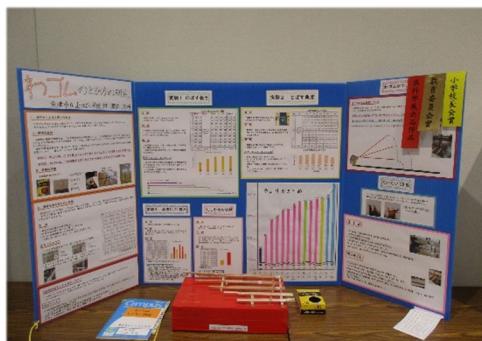
2日間併せて378名の方にご来場いただきました。来場者からは「いろんな発想があって、すばらしかった」「このような展覧会があることで、子供の頑張る力が育っていると思う」などの声が寄せられました。科学に親しむよい2日間となったと思います。

* * 科学展入賞者のみなさん * *

◇富山県科学展覧会「創意工夫賞」・魚津市教育委員会賞

「わゴムのとび方の研究」

よつば小学校 3年瀧本 悠晴



輪ゴムの飛ぶ距離について、伸ばす長さや角度をえて確かめました。条件を整理して実験し、結果を表やグラフに詳細にまとめることができました。予想とは異なる結果も受け止め、科学的に考察し、さらに発展した実験に活かす姿がすばらしかったです。

◇富山県科学展覧会「研究努力賞」・魚津市教育委員会賞

「翔べ!!りさのブルーインパルス2号機」

よつば小学校 5年宮崎 璃紗

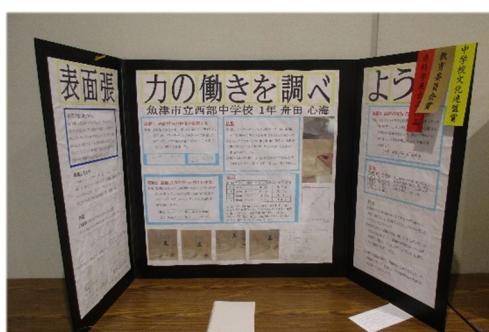


昨年度の研究から発展し、市販のグライダーでブルーインパルスと同じような動きをさせるためにはどうしたらよいか、実験と予想を繰り返しながら、研究を進めることができます。飛行機の機体をよく観察し、グライダーを改良していくことで、少しづつ狙った動きで飛ばすことができるようになり、飛行機の構造に迫っていく点がすばらしかったです。

◇富山県科学展覧会「創意工夫賞」・魚津市教育委員会賞

「表面張力の働きを調べよう」

西部中学校 1年舟田 心海



一円玉が水に浮かぶ現象をきっかけに、表面張力について研究を進めました。表面張力の大きさを数値化できるように実験の方法を工夫し、表面張力の大きさと様々な要素との関係性を追究している点がよかったです。

◇富山県発明とくふう展「魚津市長賞」受賞・魚津市教育委員会賞



「どこでも身長計はかるんじゃー」

清流小学校 1年 澤田 燐

身長計がなくてもマグネットが付くところであれば、いつでもどこでも身長を測ることができることがよかったです。巻尺が収納されており、持ち運びがしやすい点や蓋に記録を書くことができるようになっている点が工夫されています。

◇魚津市教育委員会賞

石崎善乃介	星の杜小学校 2年	魚いけどりカゴ
山崎 乙芭	道下小学校 2年	くつ下かわかし名人
藤原 和花	星の杜小学校 5年	包帯まきまきまき帯クン
金子 結菜	道下小学校 5年	いろいろ変身！私の非常持ち出し袋
平崎 凌久	東部中学校 3年	クーラーボックス冷蔵庫
澤山 敦之	清流小学校 2年	つめたさキープ 大さくせん！
関口 愛梨	清流小学校 2年	ふしぎ！どうしてティッシュで水をさえられるの？
澤山 陽香	清流小学校 5年	ゴムの力を調べよう！パート2
川岸 駆 川岸 葵	清流小学校 5年 清流小学校 3年	風にむかって進む車を作ってみよう
増垣 乃埜 山澤 理桜	東部中学校 2年 東部中学校 2年	プラナリアにいろんな意味でときめいた
川島 彩	清流小学校 5年	化石発掘！—福井に眠る恐竜たち—
稻場 琉太	清流小学校 6年	ホネからわかる魚の歯と食事

※魚津市教育センターの HP に入選作品集を掲載しています。

Google 操作研修

2学期より、児童生徒用端末が新しく Google Chromebookに入れ替わりました。新端末操作の技能習得を目的に、夏季休業中に全教職員を対象とした Google 操作研修を行いました。各自によるオンライン研修の後、Google から講師を招き、対面による研修を3日間に分けて市内6つの小・中学校にて行いました。この研修では、ペアやグループで教員役・児童生徒役を体験しながら、Google ドライブ、Google Classroom、Google フォーム等の主要アプリの操作について学びました。さらに一人一台端末を効果的に活用できるように、12月25日に情報教育研修会の開催を予定しております。児童生徒の情報活用能力を高めるためにも、よりよい研修を企画していきたいと思います。



魚津市ふるさとキャリア教育研修会

講師：長田 徹先生

8月20日（水）新川文化ホール会議室にて、東北福祉大学教育学部 長田 徹 教授をお招きし「キャリア教育の実践」と題してご講演をいただきました。市内小中学校教員43名の参加がありました。

キャリア教育を実践するとき教師が意識すべきことは何か。一人一人の子供が成長していく過程で、その子なりの個性や特徴、好きなこと等を尊重し、それを支えることの大切さや、目の前の子供とその子供の未来を結ぶ“轍”をつくることの重要性について語されました。様々な教育活動の中で子供たちが自己肯定感や自己有用感を高めながら、夢や希望に向かい自信をもって歩んでいけるようにするキャリア教育の重要性について、参加者がそれぞれに考える機会となったように思います。

（アンケートより）

- ・キャリア教育とは将来にわたり自分らしさを肯定的にとらえ、自分を大切な存在だと思えるようにするために大切なものだと感じました。
- ・子供の言葉に耳を傾け、子供の思いを受け止めることを大切にし、子供自身が成長を感じられるような温かな言葉掛けを意識していきたいです。
- ・様々なデータや実体験をもとに、学習指導要領の意図を紐解いて学ぶことができました。何気なく考えていた「キャリアパスポート」が、生徒理解の重要な手助けになることや、生徒が自身の成長を感じるきっかけになると知りました。教員がこの意図を汲み取って教育活動に関わるのとそうでないのとでは、大きな差があると感じました。



魚津市幼保小接続研修会

講師：新夕 佳子先生

8月8日（金）ありそドーム研修室にて、魚津市幼保小接続研修会を開催し、小学校より33名、幼児教育施設より11名の参加がありました。富山県教育委員会教育みらい室より幼児教育接続スーパーバイザー 新夕 佳子 先生をお招きし、「幼児教育・小学校教育の円滑な接続について」と題してご講演をいただきました。非認知能力を育成するための幼保小接続の重要性や、幼児期の「遊びを通した学び」の具体的な姿について教えていただいたことで、子供の発達段階に合わせて手立てや仕掛け、環境を工夫することの大切さを改めて気付かされました。講演後に行った地区別懇談会では、今後の円滑な接続に向けて、幼児教育施設が互いの教育活動について理解を深めるよい機会となりました。

（アンケートより）

- ・保育体験をさせていただいたこともあり、自分が見て体験した保育と子供の将来とのつながりについて、学びを深めることができました。保育園で行われている活動や遊びの意図について深く考えたことがなかったけれど、幼保の先生方と直接話をさせていただいた中で、「この活動は小学校のあの場面につながっている」と知ることができました。とても学びの多い研修でした。
- ・具体的で分かりやすく、大変よい講演でした。私は保育士出身ですが、保育にも焦点が当てられ、遊びの意味が認められてとても嬉しかったです。保育士には自信をもち、一人一人の育ちを大切にして小学校へ送り出してほしいと思いました。



課題解明研修

西部中学校・星の杜小学校・よつば小学校の3校は、「『明日も来なくなる』学校づくり」を研修テーマに、グループミーティングや活動参観を通して互いに高め合える課題解明研修を継続しています。

夏季休業中には、各グループで日時や場所を設定し、2回目のグループミーティングを行いました。1学期の実践の報告や悩みの相談、2学期に実践したいことの共有を行うグループが多く見られました。東部教育事務所の指導主事の皆様にも、話合いに参加していただきました。意見交換することによって、自身の実践を振り返ったり、個人研修テーマについての考えを深めたりするきっかけになりました。

2学期に入り、互見授業を行うグループもありました。実際の授業を自分の目で見ることで、話し方や動き、子供同士の関わらせ方や環境設定の仕方等を参考にしたいと、互いに刺激を受けているようでした。また、Teamsのチャット機能を用いて、日々の実践やちょっとした悩みを共有する場面も多くなり、気軽に相談できる場として機能するとともに、自身の実践の振り返りにも繋げる様子が見られました。課題の似ている教員同士が交流することにより、「やってみよう」という主体性がさらに高まったと思われます。

11月10日の課題解明研修はこれまでの実践の中間評価の場として位置づけ、実践の紹介に留まらず、さらに質を高めるためにはどうしたらよいかと深く考えるグループの姿が多く見られました。東部教育事務所の指導主事の皆様にも協議に入っていただくことで、新たな視点を得ることもできました。この研修を経て、さらにブラッシュアップされた実践を各々が取り組んでいるところでしょう。1月20日の最終グループミーティングにて、情報共有をする予定です。

今年度からスタートした課題解明研修。校種を越えたつながりをもつことで、新たな視点や考え方出会いよいきっかけとなりました。また、同じ中学校区で行うことで、子供たちの実態を知る情報共有の場としても機能していたように見えました。この研修が「教員一人一人が主体的に課題解決に取り組む」よりよい研修となるよう、次年度の東部中学校区に引き継いでいきたいと思います。

【今年度の研修の流れ】

4月17日	実務者会議
4月28日	三校合同研修 (講演会、研修の説明)
5月上旬	個人研修テーマ決定
5月下旬	グループ編成
6月11日	グループミーティング①
夏季休業	グループミーティング②
11月10日	課題解明研修
1月20日	グループミーティング最終



【11月10日の研修の様子】

魚津市教員パワーアップ支援事業報告

『生徒主体の学びを目指して一大館市研修で得たヒント』

魚津市立東部中学校 遠藤 利恵

魚津市教員パワーアップ支援事業の一環として、6月9日から13日までの5日間、秋田県大館市で研修を行いました。

私がお世話になった比内中学校では、大館市が掲げる「ふるさとを担う『未来大館市民』を育成する学校教育の深化」を目標に、「比内中 SDGs プロジェクト」と称したふるさとキャリア教育に取り組んでいました。

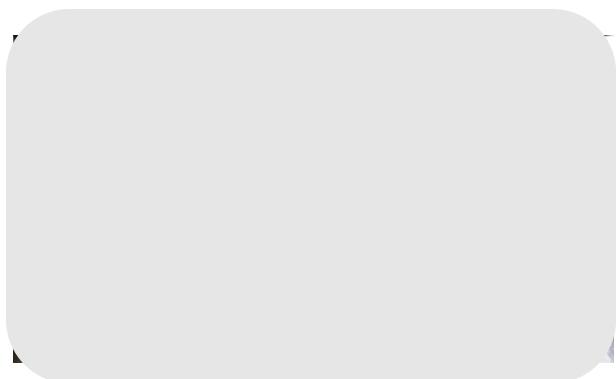
5つのプロジェクト（とんぶり SDGs、ジョブチャレンジ、達人セミナー、縦割り活動、ふるさと交流）は、地域の特色を生かし、育成したい能力を明確にした計画であり、大変興味深いものでした。さらに、「きそワン学習の推進」「テスト勉強日の設定」といった学力向上への工夫、校舎内の掲示物の充実、大北総体激励会等、教職員全員で子供を育てる意識が随所に感じられ、非常に印象的でした。

授業では、岩谷佳生教諭の理科と道徳の授業に参加しました。生徒たちは話合いや発言への反応に慣れており、小学校からの習慣付けによる小中連携の重要性を実感しました。岩谷先生の授業では「個→班→交流」という流れが徹底され、先生自身も議論に加わる姿に感銘を受けました。学習課題の設定や道徳科の授業構想について協議できたことも大きな学びでした。また、樋口慎一校長先生のコーディネートによる先生方との情報交換も有意義な時間でした。

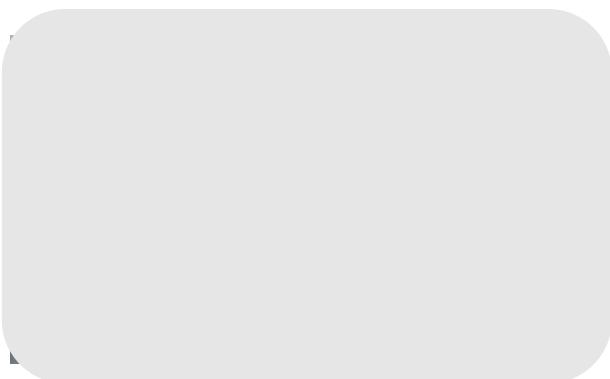
東部中学校理科部会では「生徒自らが課題解決に向けて探究する指導の工夫」に重点を置き、授業改善を取り組んでいます。これまで教師が過度にお膳立てしていた授業から、思い切って生徒に委ねる挑戦を始めました。主体的に活動する生徒の姿に一定の成果を感じる一方、課題も多く、改善を続けたいと考えています。特に、指導者としての意識を手放し、岩谷先生のように「生徒と共に議論する」伴走者としての姿勢を目指したいです。

今回の学びを自分の授業に生かすだけでなく、校内にも広めていきたいと思います。また、小中連携の重要性を再認識した研修もありました。次年度は小学校の先生方と課題解明研修に取り組む予定ですでの、充実したものにしていきたいです。

このような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。



【比内中学校の生徒の様子】



【東部中学校の生徒の様子】

『チーム学校で学びに向かう』

魚津市教育センター 中村 奈緒

6月10日（火）～13日（金）にかけて、秋田県大館市の有浦小学校へ研修に行ってきました。今回の研修では、授業参観だけでなく校内研修や教材研究の場に参加し、実際に授業実践を行うという貴重な経験をさせていただきました。

有浦小学校は大館市内の小学校で一番児童数が多く、450名程の子供が在籍します。多様な子供が在籍する中でも授業づくりを学校づくりの基盤とし、学校で確立した授業の流れ「有浦スタイル」を全校一体となって進めることで、どの学年、学級、そしてどの教員の授業であっても、子供たちが見通しをもって課題に取り組んでいました。一部ですが、紹介いたします。

○全校一体となって課題に取り組む校内研修のあり方

有浦小学校では、学校教育目標「大館を愛し、次代を担う“気付き、考え、行動できる”子どもの育成」を目指し、「有浦スタイル」という授業の流れを基本として学習活動を行っています。4月に研究主任の提案授業をもとに全職員の共通理解を図ることで、どの学級も「有浦スタイル」を基本型として授業を作り上げていました。また、子供たちにも「学び方オリエンテーション」を学期初めに開き、発達段階に応じて学びに向かう目当てを示しているそうです。教員だけでなく、子供たちとも目指す姿を共有することで、全校一体となって学びに向かうことができると気付かされました。



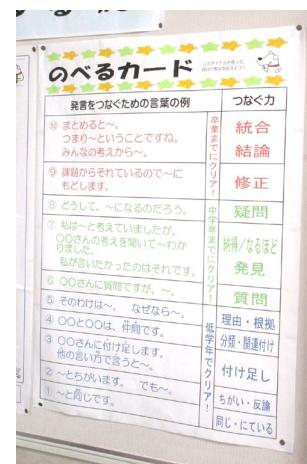
【有浦スタイル】

○課題設定と対話的な学び

上記に示した「有浦スタイル」の流れの中に「問題→課題→見通し」という導入部が提示されています。有浦小学校では、子供たちの言葉で課題を設定することを継続しており、子供たちにも「問題をつかんで課題を考える」という習慣が身に付いています。課題を子供たちの言葉から設定するには、「今までと何が違うか」「自分だったらどのように解決するか」など、子供の気付きにつながる問題提示や発問の仕方が大切だと感じました。実際に授業をさせていただき、私は設定した課題に対する「まとめ」を子供たちの言葉から引き出すことに苦戦しました。子供の思考を促すためには、精選された適切な発問が必要だと学び直しました。

子供たちが意見をつないで考えを練り上げる姿も印象的でした。6年生の国語科の学習では、「つなげます」「自分の言葉で言います」などと意見をつないでいくことで、学級全体の考えが深まり、質が高まっていく空気を感じました。このような対話的な学びは一朝一夕でできるものではありません。「有浦スタイル」での学びの継続、教員の「みんなで解決していきませんか」と声をかけファシリテーターに徹する姿、「発言をつなぐための言葉の例」や「反応ワード」を示した掲示物、そして「何を言っても大丈夫」「みんなは自分の意見を受け入れてくれる」という安心感を生む学級経営。様々な手立てや実践の積み重ねを学校全体で行ってきた成果が、6年生の学びの姿に現れていました。

この他にも、若手教員を支えるための工夫、教材研究の際は学習指導要領に立ち返るなど、有浦小学校からはたくさんのこと学ばせていただきました。今回の貴重な経験を、自分の実践だけでなく、魚津市の子供たちのよりよい学びに繋がるよう、たくさんの方に広めていきたいと思います。



【掲示物（発言をつなぐための言葉の例）】

魚津地区教育センター協議会 協業講演会 於：入善うるおい館

夏季休業中に、魚津地区教育センター協議会が主催する2つの講演会を開催したところ、多数の参加がありました。温かな学級経営・学校経営、児童生徒や保護者との関わりについて改めて考える契機となったという感想が寄せられました。ありがとうございました。

【学級経営に関する講演会】 7月29日(火) 参加者:170名

講師：大阪市立大空小学校 初代校長 木村 泰子 先生

演題：「子どもの事実から人権を視点に『学校づくり』を問い合わせませんか」

(アンケートより)

- ・『困っている子』が困らなくなる『空気』をつくるために我々教師が心がけていくべきことについて考える機会となりました。
- ・子どもをありのままに受けとめ、何に困っているのか見取り、対話することが大切だと感じました。
- ・子ども同士の学び合いを大切にし、指示するだけではなく、その子らしく生きられる環境を大人のチーム力で作っていくことが大切だと思いました。

【生徒指導に関する講演会】 8月7日(木) 参加者:107名

講師：東京家政大学人文学部 カウンセリング学科 教授 杉山 雅宏 先生

演題：「不登校支援ー不登校の子どもから学ぶ 大人にできることとはー」

(アンケートより)

- ・まずは相手を受け入れ、関わりをもつ大人が一生懸命な姿を見せることなど、教職員間で共通理解しへべクトルをそろえた支援を実践していくことの大切さを感じました。
- ・学校に行きづらい子供を無理やり学校に行かせることは、心の中で継続している工事をストップさせることだというお話が印象に残りました。
- ・子供や保護者の思いに寄り添うことを意識し、つながりを増やす働きかけを考えていきたいです。



～Column～

11月14日に第19回魚津市子ども会議が本センターで開催されました。市内小・中学校の代表児童生徒が集まり、各校で行っている特色ある取組の紹介と、テーマ「明日も来なくなる学校」について話し合う子ども座談会を行いました。今年度は子ども座談会を重視し、子供たちが自分の思いを語る時間を多めに設定しました。授業や行事への思い、給食への期待等の子供らしい意見も出る中、不登校支援の話題にも切り込むなど、対話を重ねながらテーマについて考えを深めていく姿が印象的でした。

対話が重視されているのは大人も同じです。今号ではいくつかの研修報告を掲載しておりますが、どの研修も一方的に講話を聞くというよりも、近くの方やグループの方と対話をしながら研修に参加するスタイルが多かったように思います。教師自身も「主体的・対話的で深い学び」を。今年度からスタートした「課題解明研修」においても、それをねらいの一つとして運営に携わらせていただきました。

教師の役割は「知識を一方的に教える人」から「学びを導くファシリテーター（進行役）」へ変化してきています。子供たちが自由に意見を出しやすい環境をつくり、適切な「問い合わせ」を投げかけながら、人間にしかできない質の高い対話が生まれる授業を目指したいものです。

魚津市教育センター 指導主事 中村 奈緒